



小林茂 **新連載**

この度、新しく『対人援助マガジン』の連載の顔ぶれに加わらせていただきました小林 茂です。北海道の片田舎でいくつかの仕事を掛け持ちしつつ、障害施設に勤めております。

ある日突然、日ごろからお世話になっている河岸由里子先生を介して、団先生より『対人援助マガジン』への連載のお誘いを受け、自らの経験の幅が広がればと思いい参加することになりました。

さて、しかし！連載を引き受けたのは良いが、なかなか連載のテーマが定まらない。テーマも定まらないので、タイトルも決められない。日々追われるような業務にかまけて「明日こそは…」 「今日こそは…」と思えばぐねて気づけば、締切間近。だんだんと追い込まれて、頭が変に余計なことを考え始め、『対人援助マガジン』の“連載…”、団先生＝“漫画家…”と連想が進み、ついに乱心に至り、赤塚不二夫の『天才バカボン』ならぬ、「連載、ばかぼん…」 「これで、いいのらあ！」と開き直る自分がある始末。(脳裏には、バカボンの主題歌に合わせて「これでいいのらあ～、ほんとにいいのか～？」と明るく鳴り響く!) 見事に最初から脱線気味。

『対人援助マガジン』の執筆者の皆様の

書かれたものの域に遠く及ばず、模索しながら書き進めたいと思います。よろしくお祈りします。

高垣愉佳

アメリカでヨガとマインドフルネスのプログラムに出会い、少し学んで帰ってきました。現在もオンラインやスカイプを使用して指導を受け続けていますが、帰国後少しづつ、学んだ事を人に伝える事を始めています。

MBSR(マインドフルネスストレス低減法)を開発したジョン・カバット・ジンの本の原著タイトルはこうです。「FULL CATASTROPHE LIVING」人生というのは、悩みとか苦しみとか悲惨な事で満ち溢れている。そして副題はこう続きます。「Using the wisdom of your body and mind to face stress, pain and illness.」ストレスや痛みや病に向き合うために、あなたの身心に備わっている知恵を使う。一言で言うと、セルフケアが出来るようになる為にプログラム化された練習方法です。一般向けのクラスやワークショップもおこなっていますので、ヨガやマインドフルネスのプログラムにご興味ご感心のある方はご連絡ください。

lajollastresscoping@yahoo.co.jp

水野スウ

奥能登の先っぽにある珠洲の海。子どもが小さかったころは毎夏、この海のどこかの海岸でキャンプをしたものです。その一つが木の浦。わが家のキャンプ時代が終わって数年経ったころだったか、その地に自家焙煎の珈琲豆販売所ができました。東京で焙煎の修行をした人が、木の浦にあるおじいちゃんの舟小屋で豆の焙煎と販売をはじめたという。

そんな奥能登でお商売続くのだろうか、と思ったけど、もうその頃はすでにネットで通信販売が当たり前になりつつある時代だったのでしょ。ましてや、よいものはよい、お店がどこにあるかはハンディにならないのだと知りました。

それからしばらくして珠洲にでかけた折り、懐かしさもあって立ち寄ると、見覚えのある小さな古い舟小屋で、若い女性が一人黙々と豆の焙煎をしていました。試飲させてもらいました。自分のそれまで飲んで

来たのとはまったく違う、珈琲って、こんな味だったかしら、と思うくらい新鮮でした。店主の二三味さん(にざみ、と読みます、ご本名とのこと)おすすめの舟小屋ブレンドを一袋求めて帰った記憶があります。

その舟小屋が重要なモチーフになっている映画、「さいはてにて」を観ました。主演の永作博美さんがいいなあ。口数少ない、無駄のない職人のような立ち居振る舞い、押しつけがましくなく、自分の一線を持っていて、それでいて、ひとを受け入れる深い懐を持っていて。

映画全体も、謙虚でした。説明っぽいせりふが少なく、映画の進行とともに一つづつ謎めいた霧は薄れていくけど、でも最後までその霧が完全に晴れることはない。その余韻をどう味あうか、観た側に託されるあたりがいいな。

映画に出てきた「ヨダカ珈琲」は、ロケ終了後も木の浦の海辺に建っているそうです。本物の舟小屋はその近くに今もあって、現在そこでは焙煎作業だけ。その豆を毎日、珠洲の町なかにオープンした二三味珈琲のカフェに運んで、そのお店でなら、舟小屋ブレンドその他を飲むことも、豆を買うこともできます。奥能登にお出かけの際はどうぞ一度足を運んでみてください。あ、味わうだけならネットで注文もできますしね。

浦田雅夫

安物の眼鏡が合わなくなったと思っていたら、どうも眼が老いてきたせいだと最近気づきました。目を背けたくなるような現実ばかりだけど、近眼だからしばらくはメガネなしでもよく見えるみたいです。今年は、学生時代の恩師が次々に定年を迎えられます。あの先生は今の私の年の頃は…、と考えると先生方は皆立派で、それと比べると自分は…と考えると、ま、自分は自分だから仕方がないかと思っています。いつまでも応援してくださっていることに感謝です。

見野 大介 みのだいすけ

陶芸工房 八鳥 hachi-dori

私事ながら、2月に結婚式を挙げました。引き出物はもちろん自作の器です(笑)リングピローも手作りです。

新婚旅行に行く暇もなく予定をどんどん入れてしまい、早くも妻に迷惑をかけています…。秋には新婚旅行に行けるよう、頑張りたいと思います。

関西の色んなところに出展しますので、お時間あれば足をお運びください。



【京都アートフリーマーケット】

会期: 3/13～3/15(終了)

会場: 京都文化博物館
(京都・烏丸御池)

【新美工芸会展】

会期: 3/31～4/5

会場: 大阪市立美術館
(大阪・天王寺)

【見野大介 陶芸展】

会期: 4/22～27

早樫一男

先月、機会があり、京都の縁切り神社で有名?な安井金比羅宮に行きました。いつも、車で通り過ぎているのですが、観光客や参拝者の多さにまずびっくり!

さらに、境内に掲げられている絵馬の内容の凄さにビックリするやらあきれんやら…。ネットでも話題になっているので、興味がある方はそちらの方へどうぞ…。

私ごとで言えば、あっという間に年度の変わり目を迎えたというのが率直な心境です。

これからも健康であり続けることができれば何よりなのですが…。

中島弘美

突然ですが、ここで問題です!

いま、あなたには、とても大切に思う人がいるとします。その人においしくおにぎりを食べてもらおうとしたら、あなたはどんな準備をして、どんなおにぎりを作り、どのように手渡して食べていただくようにしますか。いろいろと考えてみてください!

…これは、カウンセリングの授業で大学生に考えてもらう「問い」です。解答には、好みのおにぎりをきいてから作る、いろいろな種類の具を入れる、衛生状態に気をつける、温かいお茶も用意する、メッセージカードを添える、サプライズで渡すなど、いろいろなアイデアが出てきます。

たとえ一般的においしいといわれているおにぎりをつくっても、高価な材料でゴージャスなおにぎりができたとしても、本人には喜ばれない場合もあります。そして、おなかいっぱいのときに手作りのおにぎりを食べてもらっても、おいしく感じないかもしれません。おにぎりそのものを工夫するだけに限らず、ほかにも配慮するところがあります。

おなかぺこぺこにすいているときに好きなものを、空気の澄んだ青空のもとゆったりできる場所で、大切な人といっしょに食べたなら最高においしいでしょうね。

おいしくおにぎりを食べてもらうためのアイデアは、相手の人が何を望んでいるかを想像しながらの準備であり、対人支援でも求められるホスピタリティと考えます。

さて、みなさんは、どんなおにぎりをどんなふうに食べたいですか。

木村晃子

～ゼロ地点そのイチ@ゆうぱり～

長男の一人暮らしから約半年

大学を辞め、自宅から離れ就職、ひとり暮らしを始めてから約半年が経過した息

子。

息子から、Facebookでリクエストが届いた。へえ、Facebook始めたのか、と思いつつながら、拒否する理由もなく、親子で「友達」になった。投稿はほとんどない。珍しく、句読点がない、長々した投稿があったので読んでみると、ゼロ地点から、一歩前進した息子の様子があった。

「言葉の力」というタイトルで書かれていた。

就職して間もなく、息子にとっての壁が、障害者の就労支援事業所で作ってくれる昼食だった。野菜嫌いの息子には、食事の中に入っている野菜を食べることがちょっとした困り事だった。けれどもそれは残すべきものではない。必死に食べる。作ってくれたことへの感謝と共に「美味しかったです。」と食器を下げる。その繰り返しの毎日。美味しかったです、と言っているうちに、嫌いだったはずの野菜が本当に美味しく感じるようになったらしい。インゲンに格闘していた最初のころ、そして、インゲンが美味しく食べられるようになった今。「美味しかったです。」と言うことで野菜が美味しくなったことを綴っている。

また、職場には、70代の先輩がいる。朝、挨拶に行くど「元気かい?」と声をかけてくれるらしい。「元気です。」と返事してみる。例え、元気がなくても言ってみる。そうすると、なんだか1日が元気になってくるそうだ。

野菜も、元気も、自分の発する言葉次第でどうにでも変わっていくことを投稿していた。

大人になったな、と思う。

北海道 当別町 普段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。

藤信子

2, 3月は、次年度の研究会や研修のための日程を決めたり、開催場所の予約をしたりすることにしている。20年にもわたってそのようにして、自分のメモ帳に書き込んでいくと、大体次の1年間の予定が決まってしまうような気がする。スケジュールを見ながら、私はずっと病気もしないし、

研修に招く方もずっと健康という予定で、この歳になっているにも関わらず、のんきな予定ではないだろうか、と思う。ただ考えてみると20年近く月例のグループ体験を続けてきたことなど、研究会の歩みは少しずつ、積み重ねてきたことは、大切にしていることを共有してくれる人たちとの時間があるからなのだと感じている。

中村周平

私事で恐縮ですが、3月中旬から体調不良で入院しております。

尿路感染症と前立腺に膿が溜まるという病状が重なってしまいました。

対人援助学マガジンも最後の修正を行えず、今回は短信のみという申し訳ない状況です。

今回の連載までにはしっかり体調を整えて、執筆と実践に力を注ごうと思います。編集をいただいている方々には、私事でご迷惑おかけし誠に申し訳ありません。

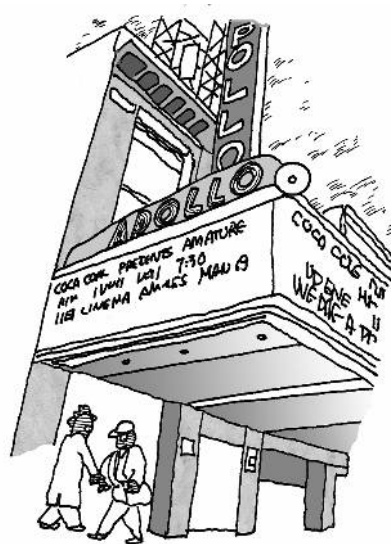
浅田英輔

今回は記念すべき10回目の電腦援助です。対人援助学マガジン第11号から連載していますので、20号がver10、30号が出るころにVer20が出るはずですが、いろいろな電腦ネタを書いてきましたが、自分でもよくまあ書くことがあるものだなと感心しております。電腦援助ではイラストや画像を多用して、いつもは無料サイトからいただいています。今回はなんと、同僚の若松友美子さんに一部かいてもらいました。電腦援助のための描きおろしです。「次はもっとこうしたい」といった意欲もありましたので、次回もお楽しみに。

中村正

3月は大学の授業がないのでいろんなことをする。ニューヨークに出かけたこともそのひとつ。いろんな体験をしたが、夜の空いた時間を活用して、ハーレムジャズナイトツアーを組んだ。ハーレムを歩いて地元の人がいくジャズクラブをめぐるというもの。以前に聞いていたハーレムとは程遠

い。もちろん案内人付きだが安心して歩ける。ニューヨークらしい街路のなかに点在しているクラブをまわる。印象的なのは黒人のベテランズ(復員軍人たちが集うクラブ。年をとったアフリカンアメリカンのジャズマンが演奏し、地域のお年寄りたちが聴く。客の多くもアフリカンアメリカンたち。楽しそうだ。場末のようなクラブにもいった。そこは渋い。狭い空間だ。演奏の合間に大きな声でおしゃべりを楽しんでいた。社交場だった。そしてきれいな青いライトを基調にしたゆったりめのクラブにもいった。間近でみる演奏は確かに迫力がある。1920年代の禁酒法時代に隠れて楽しんでいたというストリートも案内してもらった。民家のようなジャズクラブから本格的なクラブまでいろいろ。4時間程の夜のハーレムジャズナイトウォークはニューヨークらしい体験だった。



坊隆史

ひどい風邪をひいた。まともに声が出ない日が続く、対話を生業とする者として商売道具の一つ封じられ辛い日々が続いた。完全に復調していない。以前は風邪をこじらせることはなく、年齢要因も関係しているのだろうか。そういえばこの短信では健康と年齢のことを頻りに話題にしている気がする。自分にとって健康とエイジングは大事なテーマになってきたと病気が教えてくれた気がする。

松本健輔

<http://www.hummingbird-cr.com>

HummingBird 代表

ちょうど一年前に1歳の息子と二人で実家の法事に泊まりで帰った話を書いた。あれから一年、今年も子どもと二人で法事に帰った。最近特に仕事が忙しくて聞かれる時間が少ないため、去年以上に不安があった。新幹線の中で静かにしてくれるだろうか。夜寝てくれるだろうか。結論だけ言うと、大変だったが子どもとの距離が少しだけ近くなった気がした。

周りと比べても質量も子育てに積極的に関わっていると言いがたい現状だが、父親としてこういう強制的に長時間子どもといることで、普段見えない子どもの様子を知れたりする。そして、それ以上に父親としての自覚を再確認することができる。今回もまたそんな『親』として成長する機会を子どもに与えてもらった気がする。

牛若孝治

シャイなだけじゃやってけないよ

白杖を持ってバスに乗ってきた私に、よく黙って優先席から立ち上がる人がいる。その度に、なんと黙って優先席から立ち上がった人ではなく、周囲にいた人が、私に空席を教えてくれる。しかし私はこの「だまって優先席を立つ」というのが大嫌いなので、次のように断わる。「私は、黙って優先席を立つようなことをした人の後には座りたくないんです。なぜなら、「そこに座りなさい」と無言で圧力をかけられているみたいだから」とすると、席を教えてくれた人は言う。「そんなことありませんよ。だまって行為に甘えておいたら?」。その言葉に私は逆上。「あなた、なに言っているんですか!ほんとに座って欲しいと思うんだったら、「座りますか?」の一言があってもいいでしょ?留学生だって、外国人観光客だって、優先席から立ち上がるときは、たとえ日本語が十分に話せなくても、片言の日本語化英語か母国語で、なにやら声出しながら立ち上がるんですよ。日本語ができるあなたたちが、黙って席を立つって行為が、どれだけ恥ずかしいことか、考えたことあるんですか?」するとその人は

言う。「きっと日本人はシャイな人が多いんですよ」。その言葉に、更に逆上した私。「シャイなことを言い訳にしているようじゃだめですね。この国は5年後に、東京オリンピック・パラリンピックを開催しようとしてるんですよ。いつまでもそんな言い訳が通用すると思ってるんですか？これからの日本の社会は、シャイなだけじゃやってけないんですよ」。

袴田洋子

今年も年明け最初の原稿は、実家での出来事を書くのかな、とぼんやり思っていたのも束の間、大学院の最終報告発表の slides 作りと、実践研究の報告書をまとめる作業が最優先事項で、実家での出来事を思い出せないくらいになってしまいました。思い出せないくらい、というのは、別の表現をすれば、これまでと変わり無い、ということです。昨年と変わり無い両親を見ながら、それは幸せなことなのだろうと自分に言い聞かせて、帰ってきたような記憶です。

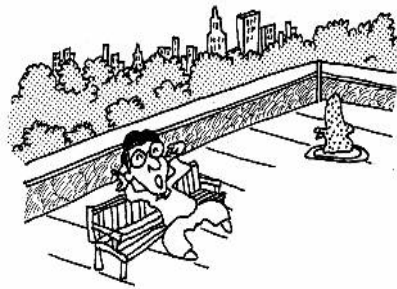
団遊

ニューヨークに10日間ほど出張した目的のひとつに、現地で活躍する日本人クリエイターに話を聞く、というのがありました。事前に人に紹介してもらい、世界的に名前が売れたカメラマン、その過程にあるイラストレーター、これから頑張っていこうとしているデザイナーの3人に会いました。どの話も刺激的でとても勉強になりましたが、中でも興味深かったのが、カメラマンが世界デビューに駒を進めたきっかけでした。

彼はそんな気は毛頭なかったと言います。日本で楽しく仕事していたし、不満もなかったそうです。ところが人の紹介で「ちょっと載せておくね」くらいの感じで世界の商業フィルムカメラマンを紹介する雑誌に作品が掲載されたそうです。すると、その発売直後、世界中のエージェントから連絡があったそうです。「その素晴らしい仕事を世界に伝えさせてくれ」と。暫くは「どうも怪しい」と無視していた彼も、あまりに熱心な一人に少しだけ作品を預

けてみると、その数日後に初仕事が決まり、それから文字通り世界中からオファーを受けるカメラマンになってしまったのだ、と言いました。誰より驚いているのはぼくですよ、と。

傍目にはアメリカンドリームです。でも、そのドリームの底辺にあるのは、宝くじ的な偶然ではなく「地道な仕事の積み重ね」だと思いました。良い仕事は、きっと誰かが見てくれている。世界デビューは「地道な仕事の積み重ね」のおまけみたいなものですね。



乾明紀

今年に入ってから体調が極端に悪くなる時がある。つい先日も花粉症により発熱があったが、1月上旬と3月上旬に起きた奥歯の歯痛は激痛であった。この歯痛は虫歯でもないため氷嚢で冷やすしか治療法がなかったのだが、この時期に氷嚢は体も冷えるし大変であった。この歯痛の原因であるが、ドクターの話によれば歯の食いしばりで、歯列接触癖 (TCH: Tooth Contacting Habit) によるものだという。通常、人は1日のうちで上下の歯を接触させる時間は食事も含めて20分以下だが、私の場合は、仕事や就寝中に上下の歯を長時間または強い力で噛み締めたりしてしまっていたのである。特に夜間の食いしばりは、食事の数倍の力(あるサイトによると70~80kg/cm²)がかかるという。私はいつからか、何かの理由でこの行動が強化されてしまったようである。

サトウタツヤ

3/2~5、一泊4日(機中2泊)でオーストラリア、キャンベラへ。3/16~19、三

泊4日で中国、広州へ。同じ4日間だけど、全く長さが違う。オーストラリアでは確かに濃密かつスピーディな毎日(といっても2日だけ)を実感したが、中国での4日は充満した日々であった。

後者では、福島風評被害(農家の対策)について発表したの、それを原稿化していたのだが、あえなく時間切れとなりました。マンガなら「作者急病のため休載」とでもするところでしょうか？次号には頑張って原稿を載せたいと思います。

大石仁美

このたび、子どもサポートH&Kのホームページを一新しました。SNSがどんどん成長進化していくのに対し、いつまでも旧式のホームページとチラシ配布では二一に追い付いていけません。あ〜あ時代の流れは恐ろしい。

ジジとババが細々と、ロコミで来られた方や、たまにホームページからアクセスして来られた方と契約し、孫のように可愛がってお世話するというのも家庭的でいいものですが、寄る年波のことを考えると、引き時をいつにするのか、悩ましいところでした。

思い切って後継者を一般公募してみようか。どんなふうにかかりに手を挙げる若者がいたとしても、彼らには買い取る資金はないでしょうし、賃貸契約する？よほど安くしないとやっていけないだろうな。もし上手く引き継げたとしても、後々生活していける保証はない。いやいや、エネルギーと知恵のある若者は、斬新なアイデアで乗り越えていくかもしれない。でもきっと自分たちが考えてきた理念とは遠いものになっていくだろうな。

まあそれはそれで仕方がないとして、公的機関とすみわけが出来なければ、意味がない。上手く引き継いでもらえる方法はないものだろうか。等々いろいろ考えめぐっていたのですが、一昨年、二男が突然「ぼくが母さんの跡を継いでもいいかなあ」と言い出して、「ん？転職希望？なぜ？」と不審に思いつつも、理由も聞かず、「やりたいんだったらやってみる？」と言ってしまったのでした。

息子に跡を継がすことなど全く頭になかったの、思いがけない申し出に、嬉しさ半分、不安半分というところ です。

仕事ぶりを黙って見ていると、子どもたちが「お兄ちゃん、お兄ちゃん！」と慕い、また彼も子ども好きなようで、ずい分可愛がるので、案外こういうタイプは病児保育に向いているのかもと思ったりしています。とりあえず一年間勉強して保育士資格も取ったので、やれやれほっとしたというのが今の気持ちです。

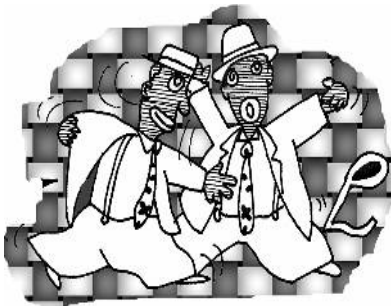
親元で学ぶというのは、良いような悪いような、親というのはどうしても甘くなりがちで、いずれ時期を見て他の施設に研修に出そうと思っているのですが、本人もそのつもりようです。

そんなわけで、本気でやる気の息子のため、子育て中の息子にあとを譲った親の責務として、生活が成り立つように応援してやるのが親の仕事と、まずはホームページ一新に至った次第です。

このホームページが多くの人目に留まり、必要とする人のところに届きますように。安心して利用して頂けますようにと祈っております。どうぞ皆さんもスマホからアクセスしてみてください。

村本邦子

今年度も終わる。前半は若干、重荷を引きずっていたが、すべての責任を手放して、後半は身も心も軽く、気持ちよくあちこち飛び回った。少しはじっくり思索する時間も持てたし、ほんの少し賢くなったような気もする。時に発達しきれない自分を持って余すこともあるが、まあまあ快調と言えるだろう。新年度はさらに自由になるので、もうちょっと器の大きい人に成熟したいものだ・・・。



國友万裕

いま、あるグループセミナーに通っています。春休みで時間のゆとりがあるからです。そこでは、できる限り、日々の幸せに感謝し、自分の強みを探して、ポジティブ思考を強めていくワークがなされます。

先生からいただいたプリントの表現の中で、自分のセールスポイントとなる言葉を探していくのですが、ぼくに当てはまるのは、「友情」「独創性」「親密」「正直」「芸術性」などが、あげられます。周りから言われるんです。今のぼくは、友情や親密さを築くのが上手いし、話しやすいと。センサティブで、正直で、独創的なので、ぼくの表現するものは面白いと。芸術性があるんでしょうか??? (自分で言うな！ 笑)。エニアグラムテストでも、芸術家タイプと出るし。

だけど、こういった自分のポジティブな部分を、ぼくはポジティブに捉えられません。ぼくは、女性との付き合いが上手いかないから、男同士の友情に逃げ込むしかないわけだし、誰にでも親密さを求めるので、裏切られた時の傷つきも大きいです。正直すぎるので、誰にでも裸の自分を見せてしまい、損することがたびたびです。独創的でユニークとは言われますが、「どこに行っても、浮く」と言われます。芸術性のある人は、悪く言えば、変わり者だから。

そんなわけで、ぼくは自分のポジティブなポイントをネガティブにしかとらえられないのです。しかし、これはでいいのかも。ネガティブさは、ぼくの持ち味かもしれません。例えば、中島みゆきさんは、暗い、暗いと言われながら、悲しい歌を歌い続けて40年、一線の人気を保っています。彼女が明るくなったら、人気なくなるでしょう。ぼくがネガティブでなくなったら、ぼくの個性がなくなる。だから、ネガティブな自分をポジティブにとらえましょう！！

北村真也

京都府教育委員会認定フリースクール

「アウラ学びの森 知誠館」代表。

(<http://tiseikan.com>)

本日、立命館大学の土曜講座でお話しする機会をいただきました。不登校という挫折体験を自己変容の大切な機会として生きていく若者たちの姿を少しでもご紹介できればと思っています。

古川秀明

今回書きながら、自分につくづく団先生のお世話になっているなあと改めて実感しました。それと共に、こうして自分がやった講演会やライブを振りかえることによって、かなり反省や学びがあることもわかりました。自分は絵や漫画が描けないので歌を歌っていますが、団先生みたいに絵が描けたらなあ・・・と思う今日この頃です。あ、みなさんお気づきかも知れませんが、団先生の書かれる「字」もかっこいいですよ。

西川友理

4月から、京都西山短期大学において専任講師として、保育士養成に携わることになりました。10年程の間、仕事の軸足を常に「社会福祉士養成」においてきたことから、なんだかまったく別の分野に行くような、少し不安で楽しみなワクワクした気持ちです。社会福祉士も保育士も、同じ対人援助職。共通点を見つけながら頑張っていきたいと思います。

余談ですが、このマガジンの連載について、「福祉系対人援助職養成の現場から」という広く漠としたタイトルにしていたおかげで、テーマを大きく変える必要がないのがラッキーです(笑)。またその一方で、この連載をさせていただいていたからこそ、「福祉系対人援助職養成」という地続きで次の仕事に向かう気持ちでいれるなあと思うのです。

坂口伊都

息子と母である私は、初めての受験を経験しました。おかげさまで、公立高校の前期試験で合格でき、親子共に現在は脱力感状態です(笑)受験が始まったのは、2年生の夏の部活動が終了してからでした。驚くような内申点を2年生1学期に取って

いたので、両親揃って息子に「これはあかんで、何とかしないと」という話をしていました。そこで夫が、塾の資料請求を何校かにしました。すると、電話がすぐにかかってきて、まずは見学に面談に実力テストに来てくださいと言われます。息子は、部活動に夢中で塾には行かぬが、部活動が終わってからは行かぬと譲りません。塾側は、もうすぐにも始めた方がと何回も電話をかけてきます。息子が、その気にならないとお金をドブに捨てるようなものなので、待つことにしました。そういう時に限って、大会に勝つのですよね。嬉しいやら、焦るやらの毎日でした。

ここの塾にと決まって、息子は塾の先生に自分がどのような状態であるのかを言い渡されました。そして、しっかりと挨拶をしろという事もバシッと言われたそうです。親の言う事なんか聞かない時期でしたから、息子にはカウンターパンチだったのではないかと思います。このスタート地点で、息子は本当に高校に行けるのだろうかと思いました。「3年生の2学期が勝負やで〜」が合言葉のようになり、息子も気を引き締めたようです。2学期の成績は、目をそらさずに見られる程度になり、私学の受験に備えました。息子は、何と願書提出の前日に私学の願書をもっていないと言いました。「なんですって〜」、両親はめまいを感じました。私学も何とか合格してほっとしていると、次は本命校の受験前に「行き方忘れたなあ」と言い出します。「前日に、電車に乗って行ってこーい」となり、確認に行っていました。母から見て、息子は塾以外で勉強しているように全く見えません。それでも、淡々と毎日を平気な顔して過ごしているので、まっいいかと思って見守ることにしました。前期試験で息子が合格して、まさに本番に強い奴だと思えます。自分で決めないと動かない息子です。母は、これからも見守りになるのでしょうか。

河岸由里子

臨床心理士 北海道

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

最近考える力が劣ってきた気がする。

何かスイッチが入ると良いのだが、中々そのスイッチが入らない。頭が動いてくれない感じがするのだ。これって老化なのだろうか？

何だか大台に乗った途端に老化を感じる。左膝も痛いし、物は忘れるし、物をなくすし。しょっちゅう「探し物はなんですか？」状態。まだ自分がかけている眼鏡を探したことは無いが困ったもんだ。きっと運動をしないといけないのだと思うが中々その元気が出ない。雪が積もっている間は、滑りやすいので散歩も難しい。転んで骨でも折ったら余計に老化が進むだろう。ステッパーを買って置いているが、減多に乗らない。こういうものは色々買っていても大抵三日坊主だ。動機づけが弱い。もっとしっかりした動機を持たないと頑張れない。

まだまだやらねばならない事、やりたい事がある。へたっている場合ではないのだが……。そうだ！肉を食べなくちゃ！元気の元はやっぱり肉！明日はステーキにしよう！

団士郎

「家族の練習問題」第6巻～大人に「なる」、「する」～の編集集中です。

ここに第一巻から第六巻まで、コラムを書いていた方のお名前をあげてみます。

第一巻

沢木耕太郎(作家)

大林宣彦(映画監督)

セキユリヲ(デザイナー)

第二巻

駒崎弘樹(社会起業家)

しんどうこうすけ(マルチクリエイター)

藤本吉伸(幼稚園長)

第三巻

萩本欽一(コメディアン)

原田宗典(作家)

星野真里(女優)

第四巻

ヤマザキマリ(マンガ家)

柳月美智子(作家)

乙武洋匡(タレント)

第五巻

辻村深月(作家)

中田敦彦(芸人)

石井裕也(映画監督)

第六巻

内田樹(思想家)

河瀬直美(映画監督)

吉野朔実(マンガ家)

そうそうたる顔ぶれです。よくこんな方々が小出版社発行の無名マンガ家の本のために、コラムを書いて下さるものだと思います。

少し誇らしいのは、多数の方に「作品集を見て引き受けることにした」と言ってもらっていることです。当然、編集者の努力があるのですが、既刊本をお渡しして、読んでいただいた上で、執筆していただけています。

このことは私にあらためて、「木陰の物語」の力を感じさせてくれます。毎月一本、十五年以上も描き続けられているのも、その力のおかげかもしれません。

「継続は力なり」を、言葉ではなく、実感として受け止めている今です。



岡崎正明

窓口に来るお客さんと、ごく稀に「お役所は敵だ！」というオーラの方がおられる。本来の用件は手続きなんかじゃなく、とにかく怒りに来た文脈のほうビンビン感じられる方々である。あまり安易に「モンスター○○」などと名付けて騒ぎ立てるのは

好きではないが、確かにそういう人は存在するし、対応する職員は疲弊する。とくに親身になろうとする人ほど傷が深かったりする。

この手のお客さんがよく言われるのが「だいたいお前ら公務員は！」「そもそも役所は！」という『ひとくりフレーズ』。言いやすく言い返せない。相手をカチンとさせるのに効果的なフレーズだ。自分で「広島人は言葉が汚くて…」なんて使うのはアリだが、他人から「広島人ってこうよね」などと決めつけられると腹が立つ。不思議なもんだ。『ひとくりフレーズ』は話が単純化できて歯切れも良いが、他者に対して使う際には取扱注意。少なくとも、個性や少数派を無視しているという自覚はあるのだろう。

静かな大阪のおばちゃんも、サッカーが下手なブラジル人も実在するのだから。『ひとくりフレーズ』のお客さんの対応では半分は腹立ちながらも、もう半分は「この人の目的はなんだろう」と考えている。なかなか答えは出ないが、ひとつだけ分かること。それはこの手の発言とそれに過剰に反応することが、問題解決の役に立ったためしがないということだ。

「だいたい〇国のやつらは！」「これだから〇〇のやつは！」なんだかちまたで聞く機会が増えた気がするこんなフレーズ。解決の役に立たないことだけは理解しておくべきかと思う。

鶴谷圭一

20号はほぼITカンファレンスの紹介でしたが、ほぼ文章を書くことなくリンクしたほうが正確に伝わると思った。だって自分が一生懸命ノート取った内容がそっくりそのままテキストでUPされてるんだもん。(^^)

僕ら幼稚園団体でも多くの教育研究会が開催されるけど、あんなに詳細が整理されてネット上にUPされることはほとんど無い。さすがにIT企業はネット上での発信力がちがうなあー！と感心すると同時に、我々の業界はそっちのほうにもっと力入れなくていいのかなあ…と心配になってくる。一般の人々は、ネットで情報を得

ることが多い、しかも新しいことはニュースになる(ニュースもメディアだしお仲間ってことで)。したがってIT幼児教育が広がる要素は多分にある。

幼児向けソフトのプログラミングなど、教材・道具が出来上がってしまえば保育現場としてはスキルの高くないカリキュラムだろう。ことばを介しないで乳児の表情から気持ちを読み取ったり、子どもに歌うことの楽しさを伝えたり、皆でイメージを共有しながら行う演劇的活動のほうがよほど奥深いし、保育者としての資質というかスキルが問われてくる。この奥深さとITがどう関わっていけるのか、そこがこれから模索していくところかなと思います。

原町幼稚園ホームページ

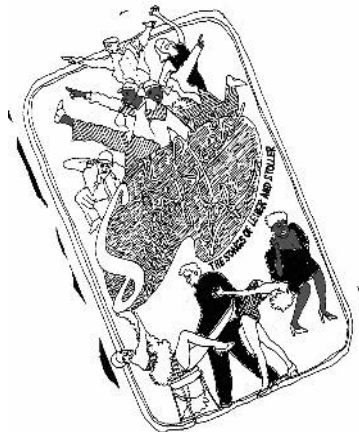
<http://www.haramachi-ki.jp>

メール osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター haramachikinder

千葉晃央

ニューヨークに1週間行きました。こうして帰ってきて今思うのは、日本は恵まれているという実感。アメリカ合衆国のニューヨークという都市。一人で歩くこともそれなりにあったのですが、1時間も歩いていると複数のホームレスに声をかけられたり、出会ったり。町は埃?とごみ。今回、雪が降っていたため、ごみ収集をする部署が除雪作業にまわるそうで、道端には収集されない家庭ごみ等の山々。駅では血まみれのひとと、その対応している警察と州兵の姿も。同行した方はスリの経験まで…。



1945~46年、財閥解体、陸軍省・海軍

省廃止、農地改革、婦人参政権の獲得、労働組合法、新憲法での戦争放棄…。なぜかこんなことを強く意識した今回の経験だった。100年前の日本の資料で読んだこと、戦前の日本の資料で読んだこと、親世代、祖父母世代からの話でも聞いているその頃の「日本」…。街にはホームレス、裕福な家には使用人、他国・地域等民族的背景がある人の厳しい境遇、小作人が圧倒的…。今の日本が恵まれているという実感の背景に歴史的に何が起こってきたのかということを感じざるを得ない。財閥系のグループ化、自衛隊、大規模農業の奨励・株式会社方式の農業の動き、投票率の低下、労働組合の弱体化、自衛隊の海外派遣への動き…。1945~1946年に起こったことへの真逆のことが次々といよいよ起こってきた。「日本」と簡単に言っても、時代によって全然ちがう。日本が恵まれているのは日本人が何をして、どういう「力」が働いて今ここにたどりついたのか?を考えないといけない。そして、今恵まれていると感じていても、国は借金だらけであることも忘れられない。

私のいる福祉業界も相似形だ。福祉サービス提供主体の大型化を奨励する国の動き、海外からの福祉労働力の導入、労働組合はもともと非常に少ない、低賃金労働の固定化…。そら、ピケティも話題になるがな!

今までしていない動きをしていこう!まずは自分から。そんなことを思ったニューヨーク。帰国後は時差ボケにとんでもなくダメージを受けています。

大川聡子

1/23に、私の勤務校で大変お世話になった、人間環境大学教授の津村智恵子先生が亡くなりました。73歳でした。公務員から大学に転職した私は、右も左も分からず、周りの先生方にたくさんご迷惑をかけ、「本当にあなたは褒めるところがないわねえ」と言われていましたが、うまくいった時は人一倍喜んでくれました。社会学で博士課程に進学することも反対されました。後で考えれば、困難な道だとわかっていて、もう一度よく考えろという意味だった

のかかもしれません。学位授与の時は、とても喜んでもらえました。1年前に久しぶりにお会いした時も、「論文はちゃんと書いてあるのか」と、現在の私の仕事ぶりをご存じだったのかと思うようなご指摘をピシバシとされ、お会いしていない時間の長さも忘れるほどでした。もうお会いできないのは残念ですが、先生のように熱い気持ちを持って学生を育て、現場で活躍される対人援助職の皆様のお役にたてるような研究をしていきたいと思っています。

大谷多加志

次年度から、今の仕事を続けながら大学院の博士課程に入学することにしました。36歳にして受験をしました。さすがに、これが人生最後の入学試験だろうと思います。研究のテーマは、ここでの連載でも取り上げている「新版K式発達検査」です。現在、2020年の再改訂に向け準備を進めているところで、その再改訂に関することを研究テーマに据えることにしました。2015年から3年研究して、2018年から2年かけて整えて、2020年に発行するという段取りを考えていますが、さてそんな思うようにことが進んだ経験はなく、きっと何か起こるのであろうと思います。最後にはやりおせられるよう、覚悟を決めて取り組む決意です。

竹中尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職

数年前、あるお葬式があった。孤独死。40代男性無職。検視は低体温と栄養不足。数ヶ月前、親から受け継いだ家を失った時だったので、仕事を選び好みせずに働けと言った。私には虚脱感と敗北感が混ざった感情が残った。彼には、70代の母親とようやく成人した娘がいた。二人には言いしれぬ思いが残った。お葬式は、葬儀屋さんに分割払いにしてもらって、娘が払った。娘は、祖母を年金で入れる老人施設に入れた。そして、ボーイフレンドと結婚した。私は、娘に「できなかったこともある。でも、あなたは今できることを精一杯やった。胸を張って嫁に行け」と言った。父親をお寺で預かった。娘は、時々、お参

りに来た。嫁に出した娘が実家に帰ってくるようなものだった。◆数日前に泣きながら電話をしてきた。二人目の子供ができて、幸せに暮らしていると思っていた。どうも、DVらしい。程度も分からない。でも、逃げたと言った。専門家の意見も仰いだ。深刻だと思う。本人はもう少し頑張ると言う。電話だけは欠かさないように言った。妻が眠れないようだ。待っている。◆幸せがずいぶん遠い。そんな人生を歩む人がいる。なかなかたどり着かない。チャンスは平等だと思っている人もいる。強者の理論が幅をきかせる。そんな社会を作ろうとしている人たちがいる。◆弱い者いじめはヤメロ！

川崎二三彦

残念ながら、連載第20回は休載し、延期せざるを得なくなりました。本プロフィールを執筆しているのが入院中のベッド上だということが影響していないわけではありませんが、メ切月の2月に、岩手から鹿児島まで研修講師を合計9本引き受けてしまった上に、予定外の度重なる四国某県への出張が入り込み、さる政府機関が急遽連続して会議を組み込んで参加を求めてくるなど、スケジュール管理に問題があったからです。

おまけに我が家のリフォームは今なお問題山積。せっかく出来上がった待望の書棚は棚の高さが注文と違ってサイズが合わずやり直し。

加えて3月末には横浜での単身赴任を終了してアパートを引き払うこととなり、引越し準備もしなくてはならず、職場内でも所内異動で3階から1階へ引越す必要が出てきて、てんてこ舞い状態が続いています。

などといくら言い訳しても、あかんもんはあかん。連載延期、慚愧に堪えません。

(2015/03/13記)

荒木晃子

3月19日に、初めて早稲田大学を訪問する。これまでも、学術集会や講演依頼等で東京大学や他大学を訪れる機会があったが、今回はとある科研費研究会で

報告する機会をいただいた故である。特定非営利法人卵子提供登録支援団体(NPO法人OD-NET)の理事・マッチング委員長をつとめて3年目の今、法学研究者の先生方からのお声掛けで実現した『多元多層化する家族の法と全体構造に関する実証的比較法研究』A2ユニット親子の自然と社会性グループ研究会の報告。報告タイトルは、「提供卵子による家族形成支援の実践からみた国内の課題と展望—卵子提供ドナー支援団体(NPO法人OD-NET)の活動報告—」とした。研究会のテーマは、「生殖補助医療の実情と親子法」。嫡出親子関係に関する規定である民法772条に基づいて、日本における生殖補助医療に関する行為規制の在り方を考えることなどが開催の趣旨である。

ご高名な先生方を前に、しかも、法学の専門性をもたない自分がどれほどの内容を提供できるのか自信はないが、当事者支援の実際とその実情を、自分が知る限りの問題点とその真実を報告できればと考える。過去に生殖医療に関する法律がなかった日本で生まれた/生まれるであろう子どもたちと、その子の誕生を願ひたずらその支援を求める当事者カップルの声を、そのままに届けたいと思う。それが、いま、自分にできる事、唯一なすべきことである。

「身の丈の幸せが一番良い」とは亡き両親の教えであるが、身の丈を知らない私にとって、齢50をずいぶん超えた今も、幸か不幸か、一番良い幸せがわからないままである。

